

# 『山の言葉』

(作) ハロルド・ピンター  
(訳) 則藤 力

## 登場人物

若い女

年輩の女

軍曹

将校

衛兵

囚人

頭巾を被せられた男

衛兵 2

## 場面一 [監獄の塀]

〈女達の列。年輩の女が一方の手を抱え込んでいる。彼女の足下にはバスケット。その女の肩を抱きかかえている若い女。〉

〈軍曹、続いて将校登場。軍曹、若い方の女を指さす。〉

軍曹 名前は？

若い女 名前はもう言いました。

軍曹 名前は？

若い女 名前はもう言いました。

軍曹 名前は？

将校（軍曹に）いい加減にしろ。（若い女に）何か不満でもあるのか？

若い女 あの人噛まれたんです。

将校 誰が？

〈間。〉

誰が？ 誰が噛まれたんだ？

若い女 あの人。怪我してるでしょ、手を。あの人噛まれたのよ。ほら、

ここに血が。

軍曹（若い女に）名前はなんと言うんだ？

将校 黙れ。

〈年輩の女の方へ行く。〉

手をどうしたんだ？ 誰かが噛んだのか？

〈女はゆっくりと手を差し出す。彼はじつとその手を見る。〉

誰がこんな事を？ 誰が噛んだんだ？

若い女 ドーベルマンですよ。

将校 どれだ？

〈間。〉

どの犬だ？

〈間。〉

軍曹！

〈軍曹前へ進み出る。〉

軍曹 はい。

将校 この女の手を見る。親指がちぎれそうじゃないか。

(年輩の女に) 誰だ、こんな事をしたのは？

〈彼女は彼を見つめる。〉

誰がこんな事をしたんだ？

若い女 大きな犬ですよ。

将校 そいつの名前は？

〈間。〉

そいつの名前は？

〈間。〉

犬にはみんな名前がある。名前で反応するんだ。親の名前が付け

られていて、それが奴らの名前なんだ、奴らの名前なんだぞ。噛む前に名前を言うはずだ。それが正式の手続きだからな。名前を言うてから噛みつくんだ。そいつの名前は何だった？

名前も名乗らずこの女を噛んだのなら、私とその犬を射殺してやる！

〈沈黙。〉

おい——気を付けっ！ 黙れっ、静かにしろ！ 軍曹！

軍曹  
はっ？

将校  
苦情を聞いてやれ。

軍曹  
苦情ですって？ 誰も苦情など言ってますんが？

若い女  
私たち今朝九時にここへ来るように言われたんですけど。

軍曹  
そうだ。その通り。今朝九時だ。全くその通り。何が不満だ？

若い女  
私たち今朝九時に、ここへ来るように言われたんです。今五時ですよ。ここに八時間も立ったままです。雪の中で。なのにドーベルマンで脅されて、そのうちの一匹に噛まれたんです、この人が手を。

将校  
その犬の名前は何だったんだ？

〈彼女は彼を見る。〉

若い女  
名前は知りません。

軍曹  
一言よろしいでしょうか？

将校  
言ってみろ。

軍曹　お前らが面会に来た亭主も息子も親父も糞つたれだ。みんな国家

の敵だ。奴等はみんな糞つたれだ。

〈将校が女たちの前へ進み出る。〉

将校

さて諸君。お前たちは山の人間だ。解るな？　お前たちの言葉は

死んだも同然、無効だ。禁止されている。ここで山の言葉を使うの

は認めない。よって面会中といえども山の言葉を喋ってはならん。

許可はできない。いいな？　できないことになっている。法による

禁止である。いいのは首都の言葉だけだ。ここで認められる言葉は

ただそれのみ。もし山の言葉を使えば厳しく罰せられることになる

ぞ。これは軍の命令であり、法令である。お前たちの言葉は使用禁

止だ。無効だ。何人もお前たちの言葉を喋ることは許されぬ。山

の言葉はもはや存在しないのだ。何か質問は？

若い女

私は山の言葉を使いません。

〈沈黙。将校と軍曹はゆっくりと彼女の周りを一巡する。軍曹が彼女のお

尻に触る。〉

軍曹

お前はどんな言葉を喋るんだい？　えっ、この尻は何語を喋るん

だよ？

将校

軍曹、この女たちはまだ罪を犯した訳じゃないぞ。いいな。

軍曹

はっ！　しかしあれの罪を犯してないとは言えないでしょう？

将校 ああ、それはそうだ。無論そんなことは言つたらん。

軍曹 怪しい臭いがぶんぷんする。ムチムチするのは罪ゆえにと。

将校 この女はまだ山の言葉を喋ってはおらん。

〈女は軍曹の手から逃れて二人の男たちの方を向く。〉

若い女 私はサラ・ジョンソン。夫に面会に来たんです。当然でしょ。

どこですあの人？

将校 証明書をどうぞ。

〈彼女は証明書を渡す。将校はそれを調べ、軍曹の方を向く。〉

彼は山の出身じゃない。間違つてそっちに入れられたんだ。

軍曹 この女ですよ。すつごくインテリみたいだから。

将校 しかし尻がムッチリしてるって言ったぞ、さつき。

軍曹 ですからインテリの尻が最高にしびれるんですよ。

〈暗転〉

場 面 二 〔面会室〕

〈立っている一人の囚人とバスケットを持って座っている年輩の女。  
彼女の後ろに衛兵が立っている。〉

〈その囚人と女は田舎なまりの強い言葉で話す。〉

〈沈黙。〉

年輩の女　パンを持つてるずら――

〈衛兵は棒で彼女をこづく。〉

衛兵　禁止。禁止された言葉だ。

〈彼女は衛兵を見る。衛兵は彼女をこづく。〉

禁止されてるんだ。(囚人に)言ってやれ、首都の言葉で喋るよう  
に。

囚人　これは喋れねえもんで。

〈沈黙。〉

これは喋れねえもんで。

〈沈黙。〉

年輩の女　リンゴもあるずら――

〈衛兵は彼女をこづき、叫ぶ。〉

衛兵　禁止だ！　禁止と言ったら禁止だ、禁止！　畜生め！(囚人に)

わしが言っとなることが解らんのか、こいつは？

囚人　さいです。

衛兵　ほんまか？

〈彼女をかがみ込んで見る。〉

解らんのか、お前？

〈彼女はじつと衛兵を見上げる。〉

囚人　年なもんで、解らねえんです。

衛兵　誰のせいだというんだ？

〈彼は笑う。〉

言つとくがわしのせいじゃないからな。それにもう一つ、わしには

女房と三人の子供がいる。みんなガラクタだ、お前らは。

〈沈黙。〉

囚人　わしにも女房と三人の子供がいます。

衛兵　何だって？

〈沈黙。〉

何がいるって？

〈沈黙。〉

何と言ったんだ？　何がいるだと？

〈沈黙。〉

いったい何がいるんだ、お前に？

〈彼は電話を取り、ダイヤルを一度回す。〉



軍曹ですか？　こちら「青部屋」です……そうです……ご報告  
しようと思つてたところです、軍曹……どうやらババを引いたよう  
です。

〈姿が見える程度に照明を半分落とす。〉

〈頭上から声が聞こえる。〉

年輩の女の声　ややが待つてゐるぞら。

囚人の声　手を噛まれたのけえ。

年輩の女の声　みんな待つてゐるぞら。

囚人の声　おつかあの手を噛ませやがったな、あいつら。

年輩の女の声　おめえさまが帰つてくりや、大喜びするぞら。みんなおめ

えさまを待つてゐる。みんな待つてゐるぞら。みんな会いたがつて  
るぞら。

〈照明、元の明るさに戻す。軍曹登場。〉

軍曹　どんなババだ？

〈暗転〉

場面三　〔闇の中の声〕

軍曹の声　誰だ、あの女おま？　ここで何をしてるんだ、あの女おまは？

あのドアからあの女を入れたのは誰だ？

衛兵2の声 あれは奴の女房です。

〈照明、元の明るさに戻す。〉

〈廊下。〉

〈衛兵と軍曹に支えられ、頭巾を被せられた男。少し離れた所で彼らを見つめている若い女。〉

軍曹

何だこれは、クダラのカモ子夫人の面会許可書？ おい、アカチ

ヤン・カーンはどこだ？ 何だってアカチャン・カーンを連れて来

たんだ、クダラのカモ子夫人に？

〈軍曹は若い女の所へ行く。〉

やあ、これはどうも。済みません。行政部でちよつとした支障があったようで。違う入口からご案内したらしい。信じがたいことです。たまにこんなこともありまして。とにかく、その、映画チックに言わせてもらおうと、つまり何か私でお役に立つことができましたら何なりと。

〈姿が見える程度に照明を半分落とす。〉

〈頭上から声が聞こえる。〉

男の声 君が眠っているのをじっと僕は見つめている。それから君の眼が

開く。のぞき込んでいる僕を見上げて君は微笑む。

若い女の声　あなたは微笑む。眼が開くと、のぞき込んでるあなたを見て私は微笑む。

男の声　僕たちは湖の上。

若い女の声　時は春。

男の声　君を抱きしめ、僕は君にぬくもりを与える。

若い女の声　眼が開くと、のぞき込んでるあなたを見て私は微笑む。

〈照明が明るくなる。頭巾を被せられた男がぐず折れる。若い女が悲鳴をあげる。〉

若い女　チャーリー！

〈軍曹が指をパチンと鳴らす。衛兵が男をひきずって退場。〉

軍曹　そう、入口を間違えたんですよ。きっとコンピューターのせい間違いありません。コンピューターが二つもヘルニアにかかるなんてね。でも何と言いましょか——そのもしこの生活のことについて何かお知りになりたいことがございましたら、奴が火曜日毎この事務所に來ることになってます、雨が降らなければ。好きな話題なら実によく通じていますよ、彼は。近いうちに電話してみて下さい。ちゃんと会ってくれます。名前はドウクスです。ジョウゼフ・ドウクス。

若い女 彼とセックスしてもいい？ しても不都合ないでしょう？

軍曹 そりゃあもう。問題ありません。

若い女 ありがとうございます。

〈暗転〉

場面四 〔面会室〕

〈衛兵。年輩の女。囚人。〉

〈沈黙。〉

〈囚人の顔には血がついており、座って震えている。女はじっとしている。衛兵は窓から外を眺めている。ふりむいて二人を見る。〉

衛兵 ああ、言うのを忘れていたが、法令が今度変わった。喋ってよいのだ。山の言葉で話してよいことになった。今度お達しがあるまではな。

囚人 いいんですか？

衛兵 そうだ。次のお達しがあるまでな。新法令だ。

〈間。〉

囚人　おつかあ、喋ってもええんだとよ。

〈間。〉

おつかあ、わしの喋ってるのが解るかい。ええ？　喋ってもええんだと。わしらの言葉で喋ってみれ。

〈彼女は黙っている。〉

ほれ、喋ってみれ。

〈間。〉

聞こえるかい、おつかあ？　こうしてわしらの言葉で喋ってるのが。

〈間。〉

聞こえるかい。

〈間。〉

わしらの言葉ぞ。

〈間。〉

聞こえねえのかい？　聞こえるのかい？

〈彼女は反応しない。〉

おつかあ？

衛兵

お前らの言葉で喋っていいって言ってやれ。新しい法令だと。次のお達しがあるまでな。

囚人　　おっかあ？

〈彼女は反応を示さない。黙って座ったままである。〉

〈囚人が次第に震え出す。彼は椅子からくず折れてひざまずき、喘ぎ、激しく身を震わせ始める。〉

〈軍曹が部屋の中へ入って来、床の上で震えている囚人をじっと観察する。〉

軍曹（衛兵に）　ほら見ろ。お前が余計な手助けなどするから、奴等は意地になるんだ。

〈暗転〉

\*この訳のテキストは Harold Pinter: *Mountain Language*, (London: Faber and Faber, 1988) を用いた。(この劇は一九八八年十月二十日、ロンドンのナショナル・シアターにて初演された。)